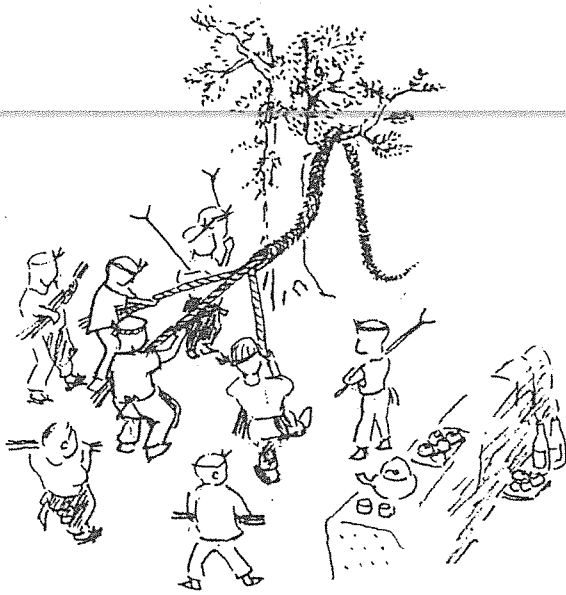


にわらを分けて差し出す者三人、縄が出来た程引上げる者三人で約九人でした。

私は藁を分けてない手に渡す役目でした。作業は午前九時から始められ、午後三時頃には後片付けまできれいに終わりました。昼食は各自、自宅で簡単にとり割当てられた部署に責任があり一生懸命でありました。

綱引き現場の道路もきれいに掃かれ、残ったものは新調された綱のみでした。



三時過ぎには、婦人会で準備された、焼酎とさかなが出されました。さかなは、里芋、昆布、大根、油揚げ、コンニャク等の煮染<sup>にしみ</sup>で現代のような魚気<sup>さかなけ</sup>は全くありませんでした。

やがて本番の行事があるので深酒する人もなく、早目に解散し、我家のしまいをして日没頃には役員、青年団員達が勢ぞろいし綱を引き延ばしたり、照明（ちようちんが用いられた）の準備また、中央部に位置する奥村宅の道路端二階の屋根裏に、あらかじめ準備してあった審判席も設けられました。審判員は両軍の幹部四、五名でありました。両軍の組分けは、例年どおり東、西、平原の住民が主体で、赤軍が東平原・中島地区の一部・川田製糸工場・其の他白軍が西平原・中島地区の一部・高月製糸工場・其の他でした。

やがて夕やみ迫る頃になると 東西から続々と綱引きの若者達を先頭に、応援団、見物人達が黒山のように道路を埋めてしまいました。

役員の指示に従い、綱引きの態勢に入る。両軍の人数等はお構いなし。綱一ぱいに着く、中央部が三m位すい

ているだけでありました。

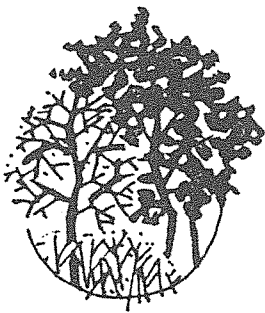
役員が駆け巡り、OKの合図で中央係りが真上に在る審判席に合図する。合図を受けて審判席より鐘の乱打でいっせい「ヨイショ・ヨイショ」の掛声も村中に聞こえました。負けそうになると応援者も割込み加勢をします。一歩進み一歩下ること数分遂に力尽きて前へ前へと引かれて行く、勝負ありの鐘の音、今度こそはと作戦を練る。二回目も前回同様にして、三本勝負で終わります。

東が勝てば若者達がそのまゝ引きずって、上江小学校運動場の「センダン」の木の根元に巻き付け、東が勝てば同様にして金比羅様の第一鳥居の根元に巻き付けて、綱を処理するのが慣例でありました。

綱引きの終わる頃には、早くも山下地区の方から踊りの呼び太鼓が鳴り響いていました。綱引き現場には十数名の後片付け者が残り、ほとんどの人が行列をなして踊りの方へ流れて行き、嵐の去った後のようにありました。踊りの方では櫓を中心に踊りの輪が段々と広がって行き、九時十時は真っ盛りでした。踊り子はもちろん、見物人にも、焼酎、大豆の煮豆が振舞われました。お盆に

湯呑み五、六個乗せ片手に一升びんを持った人、その後煮豆を馬穴<sup>ばけつ</sup>に盛り、汁しゃもじで振舞う人この二人連れで観客の間を縫うようにして振舞っていました。頂く方は手くぼです。子供達は両手くぼで頂くという具合でした。

又その晩は十五夜様で各家庭の縁側には、「ヨソリ」「バラ」（農具家庭用品の一種）等に、ススキ、団子、果物等が供えられました。子供達は、それを断りなく頂いても黙認されるという特別の、習わしでもありました。年老いて今もあの盆踊りの音頭が、三味線の音、太鼓の音、高鍋踊りの、はやし声が聞こえるようであります。



## 昔の農業

林 ツタエ

昔の農業は季節毎にいろいろな農作物が作られていました。お正月は旧暦で行われて、松かざりの取られる頃から畠には麦の芽が出て来ます。梅の花が咲いて来る頃になると、西風がふき寒さが厳しく、麦がうき上がってくる。青い小さい麦の芽を一株、一株踏んで行きます。麦の芽がしっかり張るように、何回も踏みつけて行きます。三月から四月初めに裸の麦の穂が出て色づいて来る頃、小麦は人がはいても、わからないほど、穂が伸びてきます。又、その頃に、なたねの花ざかりでとてもきれいでした。

季節ごとにいろいろな作物が出来てきます。

五月の末から六月に小麦の刈り取りその後作物は、芋や大豆、小豆など植え付けていきます。その頃は植え付けと取り入れで、いちばん忙しい季節です。六月も中頃になると、田植えなども始まり、昔は苗床でもみ種をまき、十cmばかりになると、年な叔母さん方に取ってもらい、わかい人達は定規をつかって、二人で両方を持ち、中に

三人、入って、苗を植えながら後ろにさがって行きます。田を植える家では、十時と三時のお茶の用意に大変でした。どこの農家でも一人で出来ない仕事ですから仲間で、植えたり人を雇うなどしてすましていました。

上野地区は田は余りない所ですが、畠に野いねをたくさん作っていました。その他、ラミー、蚕など秋にはそばの白い花も、千切大根と、むかしの農業は百品、作らねばいけないと言う時代でした。みんな、手先の仕事でしたので、らちのあかない事でした。昔はどんなに小さい農家でも、牛のいない家はありませんでした。牛馬は大切な人と共に働き手でした。馬車を引いたり、すきや



馬鍬（まんが）で畠をおこしたり良く仕事をしてくれました。それでも一人前になるまでは大変でした。生まれて十ヵ月余りから、仕事を教えて行きます。始めは丸太の木を引かせたり、鞍をのせたり、とまれば「オーオー」右の時は、「右、右」と

のつなを引く。左の時は、「はしはし」と言つてつなで腹をたたくなどして教えて行きますが、走ったり、とんだりはねたりで仕事を覚えるまでは人も牛も大変でした。

そんな時代だったので、子供達も学校から帰つて来るとよく手伝つてくれました。

ちよつとの間でも、草取りに来てくれたり、夏休みなど本当に良く加勢してくれたものです。夏場は夜が明けると、朝のつゆがある内に牛の草を刈りに行きます。

そのころには畠に牛のエサを作る家はほとんどないので、雨が降つても一日も休む事の出来ない仕事でした。冬になると芋つぼの中に、しまつてある芋を、掘り出して来て、きれいに洗い、手まわしの機械で、切干し芋にきり、良くかんそうし、アルコール工場にもつて行きました。戦争中はアルコールを作りいろいろな事に使われているので少しでも出すようにと言われておりました。今は小麦、陸稲、なたね、そば、季節が来てもみる事ありません。

昔が思い出され寂しい氣もします。

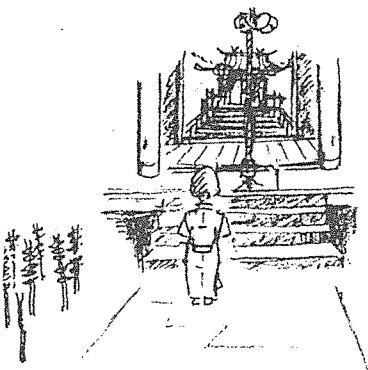
## 百度めり

森 仲吉

今から八十余年前には医者はいませんでした。病氣になつて医者にかかるとお金がたくさんいるので自宅で養生をするのが普通であつた。だんだん病氣が重くなつてから医者にかかる有様であつた。

そこで病人が出ると村の人々がそろつて神様にお参りして「病氣が早く治るよう」に祈願をしたのである。また、三社参りといつて三カ所の神様にお参りして病人の平癒祈願をして、最後の神社でお神酒<sup>みき</sup>上げをして、お互いに心配しながら病氣が早く治るように神様をお願いをした。（そのときの費用は個人で出しあつた）この三社参りは病人に伝えて病人の氣力を養つたものである。

だんだん病氣が重くなつてくると最後の神頼みとして、家族親類縁者の人々が病氣が早く治るようと同じ神社に繰り返し繰り返し百度も祈願



することにした。この祈願を世間で「百度めり」といつている。

私は子どもの頃の百度めりにつれていってもらったことがあるので記憶をたどり述べることにする。

神社はむかしばなしの第一集第二集にある（鳴野の千石船物語鳴野の思い出。鳴野の昔）水神社で明治の中頃は鳴野川の川辺に千年以上経ったといわれる松の原木が繁り琴弾きの松に優るとも劣らぬ容姿を整えていた。

その原木の根元の南側に水神社がお祀りしてあった。

水神社のすぐ下は深いおりおりした川で時には千石船が何度もつながれていた。その千石船の付近には一尋もある大きな魚が群れをなして泳いでいた。又カッパがたくさん住んでいると村人が評判をしていたほど気味の悪い場所での「百度めり」であった。家族親類縁者が二十人ほど水神社の西側の庭に集まった時は夕食を終ってからであたりはうす暗かった。庭にむしろを敷いてすわり、百度めりの準備をした。椿の葉を百枚取って準備をして水神社には木の葉をつなぐ竹の串を備えた。集まった庭から水神社との距離は十メートル位で木の葉

一枚をもって水神社に病氣平癒と祈願し木の葉を竹の串にさして帰っていく。次の人が一枚の木の葉を持って参拝する。そして次々と交替で百枚の木の葉がなくなったとき百回神社に病氣平癒祈願したことになる。

「百度めり」のしかたは地域で異なっていたが百回の数を正確にする方法に竹の串を百本造っておくのや、玉串を百本準備するとかその他色々の仕方があった。当時神社に参拝すると木の葉がたくさん竹の串にさしてある神社があった記憶がある。

戦争中郷土の出征兵士が出発の時は神社で武運長久の祈願祭をした後に戦地に出発した。神社のお守りをいただいて、護身用として大陸に海洋に出発したのである。又郷土の人々は神社に参拝し戦勝と兵士の武運長久を祈願したものである。

## 農機具のうつりかわり

竹鳩 原 重隆

農機具は明治時代から大正、昭和と大変な進歩があり、これも農地の基盤整備により農機具も次第に変わったように思う。

### 耕起機具

田畑の耕起は明治時代は鍬によってしていたが明治の後期から畜力により鋤<sup>すき</sup>が使用されるようになり、鋤も大正、昭和と改善に改善され昭和の三十年頃まで使用されていたが昭和三十年頃より耕運機が急速に導入され、その後、昭和三十四年にはトラクターが導入され各農家は牛馬にvariトラクター時代になってきた。

### 田植機具

田植は明治、大正時代は殆ど縄植作業（縄に印を付けて）その印に植えて行く方法。竹鳩地域では、竹鳩耕地整理組合により高鍋町では一番早く一反歩の区画（十アール）整理田が出来、整理地域では定木（定規）によ

り田植作業を行ってきた。昭和三十五年は舟形式の田植機一条植が導入され便利なものが出来たと賞賛されたが、欠点は折り込み式で一列ごとに種を播いて苗はこで育苗するものであった。これも束の間三年後には苗箱にばら播きで、作業が出来るように改善され二条植から四条植となり、今日は乗用田植機となっている。

### 除草機

除草機は土質に於て異なるが、砂質・粘土質等の土壌では、硬くなるので稲の生育・根張りを助長するため「ガン爪」という物が昭和十年頃まで使用されていた。その間、大正の中頃から手押し除草機が導入され、田植直後、一ヵ月後と稲の生育により除草機も変えて除草していた。戦時中、昭和十八年頃には労働力も少なくなり、水田畜力除草機が出来労働力の援助になったが、植付の時に三列置きに牛馬が通るように幾分広く株間を取る必要があること、それに牛馬の調教が必要だった。然し、人力の除草機とすると四倍から五倍の能率があがった。今日では殆ど農業の除草剤等を使用し、こんな風景は見

られなくなった。

#### 脱穀機及び稲刈取り

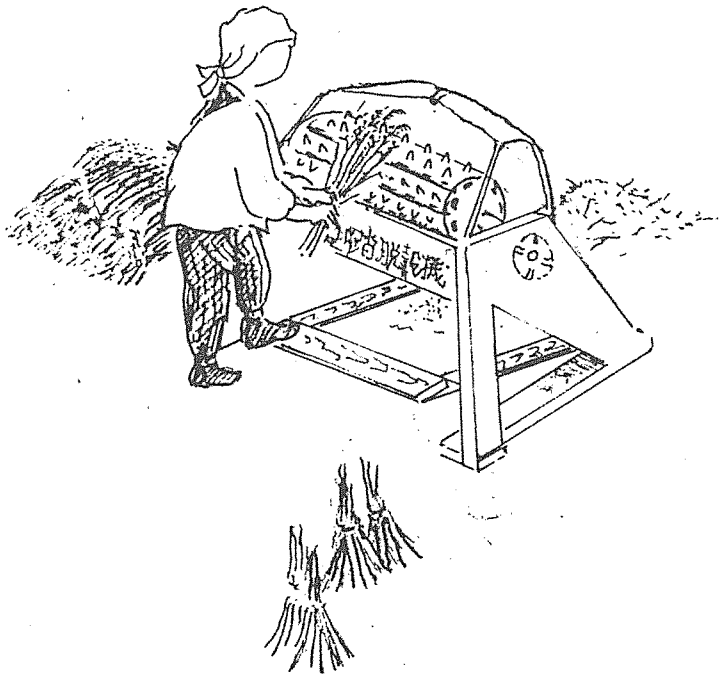
明治、大正の初期頃までは「千刃<sup>せんば</sup>」・めぐり棒等により脱穀し「みい」又は「とうみ」で選別（調整）していたが大正の中期頃より足踏脱穀機が出回るようになり昭和30年頃まで使用されていた。その間、昭和三年頃より動力に依る脱穀機も使用されるようになり、昭和三十四年頃にはバインダも出回るようになり、昭和三十六年初めて高鍋町に歩行式のコンバインが導入され引き続き昭和四十年には乗用コンバインが導入されている。

#### 乾燥機

早期水稻が昭和二十九年に導入されたが、刈り取り時期に雨が多く県は宮崎市の猪口工場に穀物乾燥機を作製させたが風力乾燥機であり昭和三十三年に火力を設置したが不十分であった。しかし、これが穀物乾燥の初めであり昭和三十五年には定地式火力乾燥機が出回る様になり、昭和四十年に循環式乾燥が出回り今日では至ところ

の農家に設置されるようになった。

以上、私の歩みを振り返って思い出を書かせていただきました。



## 追記

私が初めて出会ったトラクターは大正十四年に米国産の大型が宮崎県庁の耕地課に三台入ったものでした。町村の要望により原野の開墾に従事していたものでその後は昭和十年頃より軍需用品が優先となり、農機具は見送られ昭和二十年の終戦により食糧増産が要求されるようになり農機具も次第に進歩して来て昭和三十年頃から耕運機が農家に導入され初めた。当時、宮崎県営の伝修農場（現在の農業大学校）に大型のトラクターが整備され、農家にも昭和三十五年には十七馬力のものが導入され、その後耕運機にvariトラクターが急速に出回る様になり、当時は食糧増産の呼声のもとに共同購入には補助金まで出し大型トラクター（二十馬力）が各地に出回って来た。今日は改善に改善され小型で性能がよくなり二十三馬力程度のものが多く出回っている。

## 田植機について

田植機も昭和三十八年頃から年々改善され、歩行式の二条植、昭和四十年頃には歩行式の四条田植機が出回る

様になった。乗用田植機も昭和四十六年頃から導入され初め、四条植から六条植と大型になって田植の能率も上がって来た。しかし、圃場の整備がこれには必要となってきた。

## 火力乾燥機について

火力乾燥機も昭和三十五年より宮崎県で導入され昭和四十年には循環式になったが、乾燥機の進歩はすばらしいものがあり、当時は小型で一石型から二石型程度であったが、品種が統一されてきた。現在では三石型から四、五石型と大型化して過乾を防止する為、乾燥機ごとに水分計を設置し、一定の水分にたったら、自動的に機械が停止するようになり、品質保全に大きい役割をするようになった。

## 水杭式太陽温水器について

昭和六十年頃より太陽温水器による農作物の早期出荷が進められている。特に、スイートコーン栽培等に使用しているがあまり普及されていない状況である。



## 三社参り

羽根田 赤澤 実

私共の地区は、昔も今も二十戸たらずの集落で大部分が専業農家でありました。昔から地区行事として厳重に行われて来た三社参りに私は昭和二年より参加をしました。こうして先輩達より受継ぎ後世にと火をともし続けたのですが終戦の激動の中に消えてしまいました。その当時を思い出し大変懐かしく思っております。

その頃は四月三日が神武天皇祭で国民の祝日でございました。その日に地区内の元気な者は皆 農家であるなしに拘らず三社参りに出掛けました。比木神社より白髭神社、愛宕神社へと歩いて行く者又自転車も大変少ない時代でありましたが、自転車組は富田日置の水神様より蚊口の鶴戸神社を経て愛宕神社へと、当日は地区内はもちろん行く道筋の家々には、道路に面した門毎に国旗がはためき、神々しい気持ちで家内安全と五穀豊穡を祈願して帰り、午後三時頃には地区全員が集会場に集まって祝宴が挙げられました。

これを契機として地区民一斉に農作業も最盛期へと突

入してまいります。畑作 水田作 それに加えて養蚕も大変盛んでした。又水田の裏作である麦、菜種等も順次収穫をしてその跡に水稻の作付をしなければなりません。あれも、これも、皆、牛馬を頼りに手先の仕事ばかりでありました。ちょうどその頃は梅雨期にはいい、牛馬も雨に濡れながら田圃仕事も仲々容易なことではありませんでした。そうした中にも（十二支）午の日は牛馬も休ませて飼<sup>は</sup>を、きかせる等して、いたわりました。

### 田植え期間の六

月中旬より、共同作業にはいい、各地区一斉に田植えが始まります。現在のように用水路も完備しておらず、水源も用水池の水のみで、不十分でありました。水の引き易い田圃より



遂次始めて、水路末端とか、水の引難い田圃等は後廻しにします。

その年によって若干のずれはありますが、七月二日の半夏水はげみずと言って梅雨末期の大雨を待って、田植えを終わらせたものであります。これまでの期間中、年寄り子供まで一家族総動員で頑張りましたので、毎年七月十三日には「さのぼり」ができました。七月十三日は祇園様のお祭りで、夕方より各々家族連れにて、祇園様にお参りするのが我が地区の恒例でありました。こうした仕事を、行事を、毎年繰り返して行くうちに世の中もすっかり変わり、農業も変わってまいりました。半世紀を経た今、私共が使用して来た農機具が、早くも、歴史資料館に陳列される等、歲月の流れに感動しているところです。

### 三社参りの思い出

川田 吉松 ハナ子

日本は神国と言われて、昔から、神に祈り、神に捧げてまいりました。

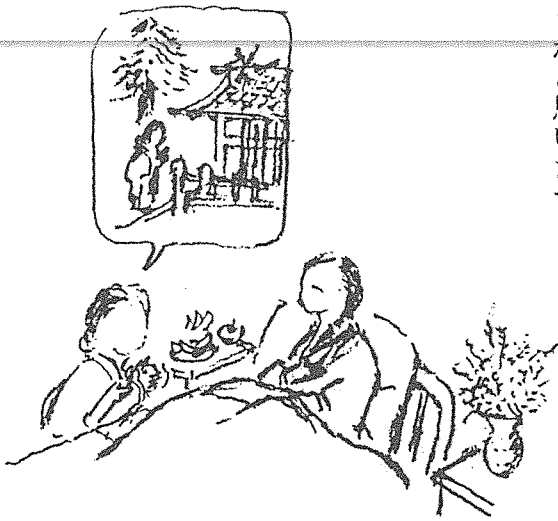
この三社参りの起源についても、私共には判りませんが、少なくとも明治、大正年間より戦中にかけて、田植前に家畜を含めて、家内安全、五穀豊穰祈願として行われたものと思いますが、大正の初めの頃でした。次のような場面にも三社参りがされたことを記憶しています。それは、医者が此の病気は、もう治らないと診断することとを「医者がさじを投げた」と申しますが、そんな病人がある場合に、その当時は、何処の神様かみさまは、何処の地蔵様じざうさまは、

「ようく、きいてくりやるげな」と言い伝えのある神様や地蔵様があちこちにおられました。

家族の者は、そんな神様や地蔵様に願かけをしたり、百度参りをして一生懸命神頼みをしました。

又親戚の者も集って、いろいろと相談をして「わしども神参りかみまゐをしゅじゃねの」と、母達が、かん瓶にお

神酒<sup>みき</sup>を入れて、有名神社に三社参りをしたことを思いだします。三社参りを終えて又その家へ行って、いろいろと報告しますと、病人さんも、お陰様で「こっでらくに、なるじゃねの」と大変喜ばれました。こうした精神療法による外、慰める方法のなかった時代でございました。又それによって段々快方に向った話も聞いていました。「病気も気から」といわれますが、そんなところから出た言葉であろうかと思っています。



## 庚申講<sup>こうしんこう</sup>について

六日町 則松 万年

### ○火産靈神社の庚申塔

庚申講という言葉をはじめて聞き、その行事に参加したのは昭和十六年の事です。農学校（現高鍋農業高校）を卒業し、家業に従事するようになり、六日町青年会に入ってからです。その行事の庚申信仰の中心である庚申塔について先ず述べていきます。

町地区の氏神様、防火の神として六日町に鎮座の火産靈神社、すなわち、夏祭りに太鼓台が出て賑わう「荒神さん」はわが家の近くにあり、その境内には二股の楠があります。舞鶴公園の大楠には及ばないけれど、高鍋では二番目とされている楠の西側に四基の庚申塔が建っています。大楠の西南には、お稲荷<sup>いなり</sup>さんが祀られており、子どもの頃、その付近に大きな石が雑然とところがついていた、その石が庚申塔だったのです。昭和十五年頃、当時の青年、東善久雄、曾我部次男さん達の努力で現在地にコンクリートで台座を作り、再建され、六日町青年会で維持、管理され、今日に及んでいます。

右から一番目、文政五年、午天、中央にウーンの梵字  
その下に庚申尊、左側に五月吉祥日と刻されています。

二番目、文化十一年、中央に庚申尊、左に甲戌、十月拾  
三日、三番目、天保九年、庚申尊、十一月吉日、左側面  
に六日町、若連中と刻んであります。四番目は正面に  
ウーンの梵字が大きく彫刻され、右側面に正月吉曜宿、  
その下に六日町若連まで読めます。尚各塔の上部に日  
(右)月(左)が彫ってあります。一番左側に台座らし  
い平坦な石が残されております。二番目の庚申塔の下部  
に七名の名前が刻まれていて、石質が凝灰岩で判りにく  
いが、右より、矢野佐右エ門、三ッ□□□、江並松次郎、  
野津原正次郎、龍原平□門、黒木□右エ門、同英□□エ、  
(□印は不明箇所)今後更に調査していきたいと思いま  
す。

#### ○庚申講のおまつり

六日町でのおまつりは年一回、原則は旧正月七日と書  
かれています。近頃は庚申の日であれば良いという事  
で行っています。

行事としては、初めに庚申塔を清掃して夕方になって、



掛ける。その前に御供物、線香、ローソク等を用意して  
仏式にて御参りします。

般若心経を読経するとありますが、今はあげていませ  
ん。皆の御参りがすんだら、掛軸は巻いて木箱に納めま  
す。もし御祭りの途中に地震があると翌日又やりなまし  
をしなければならぬといわれています。

それから料理の品数の中に必ずコンニャクを入れること

御神酒、洗米、塩等を供  
えて、全員で神拝の二礼  
二拍子、一礼をする。後  
で御供物を少しずつ各庚  
申塔に振り掛けて御祓い  
する。正式には神官によ  
る祝詞奏上とありますが、  
神官さんと呼んで行う程  
盛大にはしていません。  
後は青年会長宅を宿にし  
て、座敷の東北「鬼門」  
に青面金剛王像の掛軸を

になっています。

食するときには北を向いて黙って三切れ食べる事がきまりで、その外は一般の会食と同じです。原則はあくまで精進料理ですが昔程やかましく行われていません。コンニャクは昔から腹の清掃をする食物といわれています。

#### ○庚申尊掛図について

六日町青年会には古い木箱が伝えられています。箱の表書き庚申尊懸図、横に明治十六年旧六月十四日求ム、六日町若中、明治四十五年一月七日改造、六日町青年会、反対側に毎歳正月七日大祭の事と書かれています。

現在でもその年の青年会長宅で大切に保管されています。中には青面金剛尊が描かれた掛軸が納めてあります。主尊の青面金剛王は儀軌によれば、青身にして、一身四臂三眼の忿怒形、左上から三股叉を把り下手は棒を把る、右上は掌に一輪を拓し、下手は羂索をとる。口は大張口で、狗牙上出、頂にどくろを置き、炎髪は縦に火焰色、両膊に竜、腰、両脚に二大赤蛇を纏う。どくろの璽珞、虎皮の袴、脚下に邪鬼を二匹踏む。両辺に香炉を持つ青衣童子を置くとあり、二臂、六臂像もあると述べ

られています。六日町の掛図では左下手の棒の代わりに弓を持っていて、右上手の宝輪が剣に、右下手の羂索が矢になっています。青衣童子の一人が香炉のかわりに二鶏を持っていて、その他は儀軌に準拠して書かれ、なお下部には三猿が描かれています。

松原町にも掛軸が二本有り、青面金剛像と猿田彦大神像です。ここの青面金剛王は六臂像です。右上手に三股叉（みつまたのやり）右中手は宝剣、右下手に矢を持っている。左上手には輪宝を握っています。左中手に弓、左下手に女の髪の毛をつかんでぶらさげているのが描かれているが、これはシヨケラといって、庚申の晩にみごもって生まれた赤子であると説かれています。庚申の夜は、精進潔斎して、いわゆる身を慎む日なので、青面金剛が赤子に罰をあたえているのだといわれています。下部に鶏が二羽、猿が二匹、その外、夜叉四匹が三刺叉、槍、刀、長刀をそれぞれ持っている他は四臂像と同じです。

猿田彦大神像は白装束で、右手に神、左手に大刀を持ち、特徴は鼻が高く、後世に天狗ともいわれましたが、

古い日本の国津神で、天孫降臨の道案内をしたことが知られています。江戸中期、朱子学で有名な山崎闇斎によって説かれ、奨励され神道系の人々により、庚申信仰の主尊として広められたことですが、数量的には少なく、一般には広まらなかったことです。なお松原町には掛軸の外に、安政七年に建立された庚申尊石建控帳、諸入用控帳等、町史にも記載されているように、庚申講に関係する資料が沢山あり、お祭りは昭和二十五年頃から三、四年位は行われていたようですが現在には行われていないそうです。書類等は高鍋図書館に保管されています。蚊口中区の中町では、庚申尊掛図を二ヵ月毎の持ち回りで、庚申の日毎に、宿に集まり御茶会等されていたそうですが六十二年頃までで止められたそうです。

#### ○まとめ

戦前は毎年初庚申の日におまつりをしていましたが、戦後は食べる事に精一杯で、食物を求めて右往左往する毎日であり、信仰心も無く過していました。だんだん世の中が落ち着くに従い、話し合いの場とか、連帯感の必要性等から復活の機を迎え、昭和二十五年頃より庚申

講をするようになりました。

庚申とは十干の庚（かのえ）と十二支の申（申）とが結びついた、六十日毎に廻ってくる日や、六〇年に一回廻ってくる年ということです。昔中国の道教の思想に三尸（さんし）説というものがあつたそうで、それは、人間の体内に三尸という虫がいて、いつも人の早死を望んで居て、庚申の日毎に、人の眠っている間に、その人の体内から抜け出して、天帝に、その人の罪過を上告すると、天帝はこれを聞いてその人の死期を早めるという説のようです。三尸の上天を防ぎ、長生きするためには庚申の日に、身を慎み、一夜を眠らずに過ごす必要があります、これを守庚申といい、そして七回守庚申をつづければ、三尸は長絶するといわれています。

我国には奈良時代末期頃から宮廷貴族の間で守庚申が行われ、平安時代末期から武士の間に広まり、織田信長が柴田勝家、明智光秀らの家臣を集めて、庚申待の夜、句会を催したとあります。その後僧侶や修験者の間に浸透して三尸説の仏教化が始まり、その指導でだんだん普及して江戸時代に入って急速に広まったそうです。現代

風にいえば青年に対しての道德教育、戦前の修身のような教えであるのかも知れません。

## もちつき

宮田 中山 繁

師走の月になると、各家庭では正月の準備に入ります。特に、餅を搗いてもらうために、当時、町内に四つのグループによる餅搗き屋が開業していました。

道具小路組、水谷原組、中鶴組、宮田組で、道具小路組は道具小路を中心に小丸まで、水谷原組は、旭通り、洗町まで、中鶴組は蚊口方面が主で、中鶴まで、宮田組は、最初は範圍が広がったので二組出ていたが、後に一組になり、縦、横筏、新小路、光音寺、黒谷、蓑江、下町までで千手五雪堂が境いでした。開業は十二月二〇日から十二月三〇日までの十日間、四人一組で、そのうちの三人が搗いて、あとの一人が混ぜる（中とり）といった役目を果たしています。

餅米の世話は一切せず、ただ、蒸して、搗くまでが仕事でした。餅も切る人がひまがいたりすると、搗くの

を待っていないくはなりませんので、なかなかです。でも、昔の人は器用な人が多かったので、上手に干切ってくれる人がいて助かりました。

一日に搗く量は平均十俵ぐらいで、朝は早かったり、遅かったり、三時間頃から行ったりお客さんに合わせていました。雨の日や風の吹く日などは苦勞させられました。

この仕事も、十五年位前には止めてしまいました。最も長く続けたのは水谷原で宮田が止めたあと二年位は続けていたと思います。

止めた理由は、人手の關係が主で、搗く量が配給になつて少なくなつたことと、町ではお菓子屋さん、パン屋さんなどで餅搗きを始めたこと、家庭でも電化製品の誕生で、もちつき器で餅を搗くようになったことなど、時代の流れに押されて仕事を止めるを得なくなったのであります。餅搗きの道具一切を担いで各地



区を回るのですが、重い荷物を運ぶのは大変な苦勞でした。終戦後、一升十五錢から二十錢の相場でしたが、搗くものは大変だったと思います。米代もそれぐらいするのですから、一箇所二俵まとまるようにグループをつくってもらいました。

新小路あたりは自分でもち米を作って、搗く人が多かったので二俵から三俵は搗いていました。今想うとあの頃一日に五円の工賃が入ると喜んだものでした。

父が仕事をしていた時代は、手温めといって、最初に搗き上げた餅を、普通の大きさより、一まわり大きな餅にあんこを入れて配ばり食べさせてもらう。食べた後「どこの家のあんこはあまくておいしい。」と批評し合うのが楽しみだったそうです。また、仕事を終えて帰ってきた時には、ひとくぼ位の餅をもらってきていました。懐かしく思い出されます。

最近では、餅はお正月だけ搗くのではなく、いつでもお店で買える時代となりました。

便利のよい豊かな生活が続くと、昔の苦勞話も忘れられてしまうのが淋しく感ぜられます。

## 高鍋城の年末・年始について

下屋敷 中 武 弘

高鍋城内において、年末、年始にどのような行事が行われたか、それは何日に規定されていたかは詳らかでないが、これらの行事が歴代藩主によって多少の変化はあっても、大きくかわったとは思えません。また藩士たちもこれにならって生活をしていたと思います。ここに高鍋藩の記録にもとづき高鍋城内の年末・年始について紹介します。高鍋藩主と上級武士の行事をご覧ください。

一、 年末行事

### ○煤<sup>すす</sup>払い

人足十五人程度にて本丸を中心に行う、終了後は簡単なおもてなし、各人肴二種とお酒

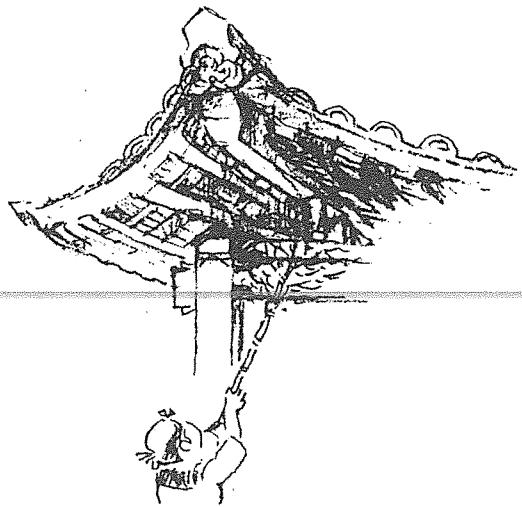
### ○煤<sup>すす</sup>竿<sup>すすき</sup>納め

吸物一つ・肴二種・お酒

### ○餅つき（十二月二十八日）

米八升<sup>おとせ</sup>御<sup>お</sup>据<sup>すえ</sup>・一斗御鏡餅・二斗御具足餅・一升五合御年玉餅・二升御雑煮餅・三升ひし形串形餅・三升坂田党一人前・二升御三献のし餅・七升諸願





・五升お供餅・一升

五合餅あられ 計五斗

五升

○大晦日（大晦日より

正月三日まで料理人三

人、小番二人）

御祝膳は三汁五菜・肴

一つ・御酒

## 二、 年始行事

### ○元日料理

屠蘇酒・雑煮・三献・力飯・三汁十一菜・御酒・

肴二つ・御菓子・（元日より三日まで、但し三汁

十一菜が二日からは二汁五菜となる）

○元日の三カ寺仏参（龍雲寺・安養寺・大龍寺）

※家老・用人・物頭の代参もあった。

### ○藩士との諸行事

御書院にて徒士以上のあいさつをうける。

給人以上へ御盃

医師、絵師お流れ頂戴

二日 御初馬（二の丸馬場にて）

三日 各お茶屋に行き御祝、直に帰城

※大手門、島田御門は七日まで開きおく

七日 ○藩主、自ら八幡、白山、天神、愛宕、祇園社へ参詣

○年始のため祝儀、藩主書院の間上段へ着座、物頭

以上（約十八名）御料理くださる

九日 各お茶屋、三カ寺（大龍寺・安養寺・龍雲寺）

へ御料理くださる

以上年末、年始の藩主を中心とした、城内の諸行事をみますと、総じて質素であり儉約に意が注がれているように見受けれます。高鍋藩が財政的にも恵まれ善政を行ったこともこのことによって立証できると思われます。

## 三、 高鍋藩上級武士の年末・年始の行事

### ○年末行事

十二月二十八日

（一）門松立てなり、門と氏神前二所也、まつ、竹の数  
定りなし、炭、くし柿、米、かちくり、餅をあら

れに切りける也なり

(二) 年徳たな松かざり、惣じて門松の通りにて恵方えにつくる也、おしき三枚年々とのえる。かわらけは都合十五也、あり合わせあればとのえず。不足分だけとのえる也。餅は二かさねそなえる。かけの魚小だい二匹ずつ也。この小だいはしまいおき六月一日のあさ、にしめに入れる。

## 大晦日

(一) 具足の餅・刀の餅はきぐ二ぜんに餅ひとかさねづつ、上に、だいだいに若松をさしのする也。餅の下に紙二枚しき、その上にゆずり葉、うらじろをのせ、餅の上にこんぶ、かちぐり、かき米、あられを少しずつおく。いづれも書院床へそなえ候事。

(二) 手掛は三方か木具の類へ、四方に紙をしきたれ、米を見合わせもり、うら白を四すみにさし、だいだいにゆずり葉をさしこんぶ、かちぐり、あられを少しずつおく也。

## 注

(三) げんかんのすてばしらへとしき一本つつ立てかけうらしろをそゆる

(四) 戸口戸口へ年なわをかくる。はんず、水おけ、手水鉢ちようすはちへも同だん(注)

(五) 御位牌たなには、長く年なわをない前にはる也  
(六) 御位牌へ年の餅十五かさね紙をしきそなゆる。

(七) 大黒、えびす様へもひとかねづつ

(八) 年始のおさえ肴は、のしこぶ、かちぐり、とうふの三品ほど、木具に紙をしきおく也。

このこと家格にてはなけれども、数の子、ごぼう等の膳いづれもの来客にさしだすによろしからぬ故翔房よりこの通りにつかまつりまた仕来る也

(九) 氏神、水神様へ灯明を上げ候事

(十) ばんに家内、としの餅すわる也。

※以下は、お歳暮せいはのことだから省略します。

○年徳ねんきまつり―正月に祭る神、この神のいる方角は万事吉である。

○同だん(同断)―前に同じということ。

## 第四部 生産

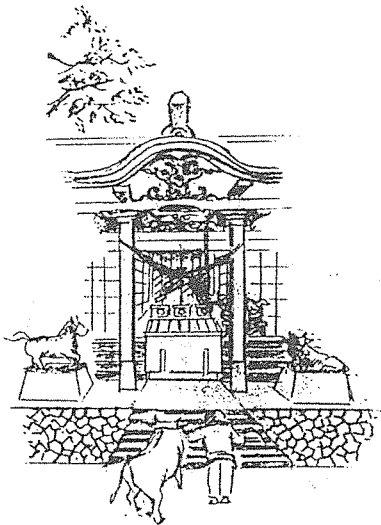
### 白鬚さと農民

竹鳩 原 重隆

上面木山の麓にお祀りしてある白鬚神社は牛馬の守護神として名高く県内はもとより県外の方まで現在も参拝者が多い。春は七月十九日、秋は十一月十九日が大祭であり、昔は牛馬を連れて参拝し牛馬の安全と繁盛を祈願した。牛馬は田畑の耕起から整地、運搬の役割りを果し、その上堆肥作りの源として大切に飼育されていた。

春の大祭には年中の牛馬の安全繁盛を午前中に祈願し午後は、さかなは、各自持寄りであるが焼酎は十二月以降六月迄に牛馬の子が生まれた家から世話人が一頭当り五合の代金を集めて酒盛りが行われた。当時は農家には牛馬が殆んど飼育されており、大きい農家では三から五頭程度の農家もあり、焼酎も充分準備が出来た。これも牛の子は放し飼いであり農作物をいためる断りのしるしの含みもあり、また農家は七月十九日の大祭りまでには是が非でも田植が終るようにつとめた。

参拝では敷地内にある竹笹と事務所でお札を受け、笹の葉は持帰り牛馬に喰わせ安産を祈り、お札は畜舎の目のつく所に張り付けていた。十一月十九日秋の大祭では無事牛馬が働いてくれたことに感謝する参拝であり、春の大祭、秋の大祭共に神社の敷地内は、もとより参道には出店が多く出てにぎやかであった。竹鳩では、春の大祭同様であるが焼酎代は七月以降十一月迄に生まれた家から世話人が集めて酒盛りも盛大に行われていた。しかし、これも昭和四十年迄であり、農業も機械化され牛馬も少なくなり今日ではこの行事も中止となっている。当時、この白鬚さは、農家の慰安も兼ねた行事でもあった。



## 千石船の進水

蚊口 久保田 悦郎

私の家は、廻船業でした。私が幼い頃の記憶している進水行事について述べます。大正の中頃まで小丸川は水量も豊かで、たくさん大きな船が出たり入ったりして賑わっていました。

私の叔父は船長で、千石船を操っては大阪方面から油津あたりまでいろんな荷物を運搬していました。船が古くなり船足もままならぬ状態となったので新しく千石船を造ることになりました。私の幼い頃で、船は都農町で造り進水式で私は新しい大きな船に乗せて貰い勢いよく滑り出した感激を今でも忘れることができません。

この進水式に当っては、船主・船長・棟梁はじめ造船に携った人々が船上に集い、船はたくさんさんの旗で飾りつけました。そして、神官さんに来てもらい御祓・献饌・祝詞奏上などの神事のあと、船の命名を行いました。船の名は「司丸<sup>つかまる</sup>」とつけられ、船上に御神酒が注がれ船の航海安全が祈願されました。

この頃になると「今日は饌供<sup>せんぐ</sup>じゃげな」と進水式を

伝え聞いた人々がたくさん祝餅拾いに集まって来ていました。

饌供とは、新しく家や船を造ったとき神前、そして供物をお祝いに来た人々にお分けするため撒くようになったと考えます。

この饌供には前の日から搗いた紅白の餅<sup>もち</sup>をたくさん「もろぶた」に入れて準備し、神事が終わると船上から撒いたものです。特に船主、船尾の四隅からは「角餅<sup>かくもち</sup>」といって大型の餅を投げました。これを拾った人は縁起にあやかるとされ角餅は争って拾ったものです。

今でもそうですが大きな袋を用意して落ちて来る餅が頭に当るのにもめげず拾ったものです。

景気よく大声をあげ餅を撒いている叔父の姿が目につかんできます。

饌供<sup>せんぐ</sup>撒きが終わるといよいよ船の進水です。船長の

